



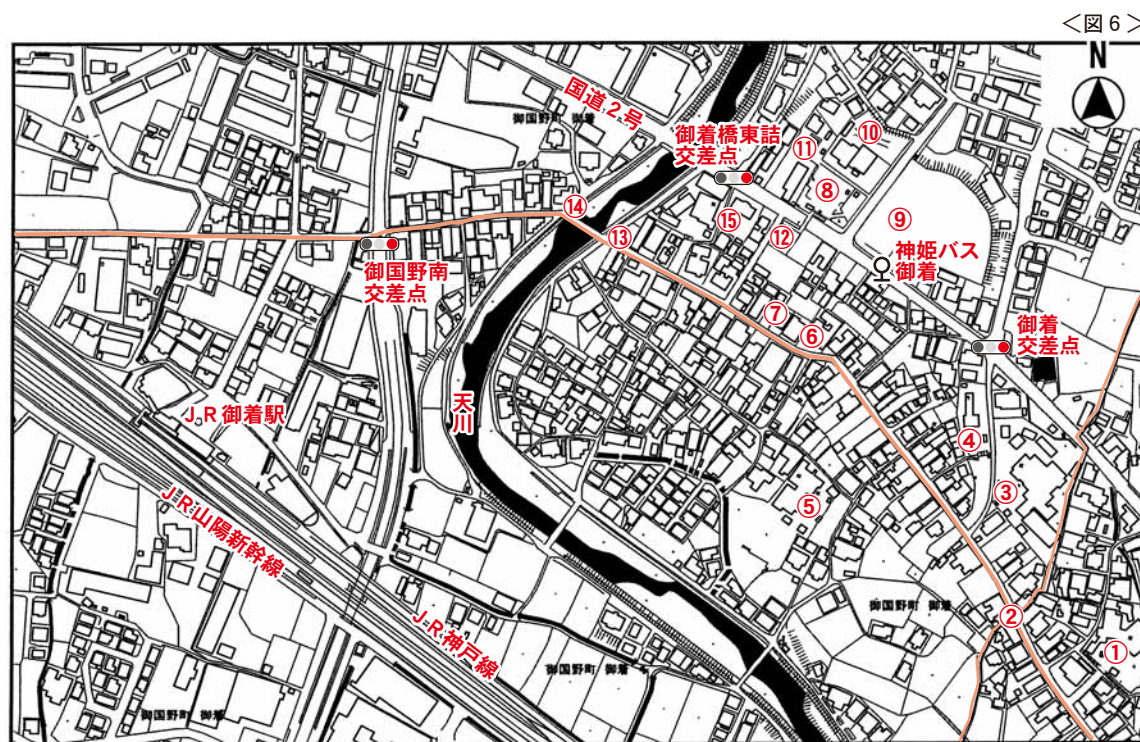
『西国街道』をたずねて その1

「西国街道」は「山陽道(近世山陽道)」、「中国街道」、「中国路」、「西国往還」とも単に「往還」とも呼ばれ、近世(江戸時代)には五街道につぐ主要な街道でした。五街道は幕府道中奉行直轄でしたが、その他の街道は沿道諸藩の整備によることもあり、実は起点・終点や宿駅等が定まっていたわけではありませんでした。西国街道の起点は京都東寺口、大坂、西宮(京都からの山崎街道と大坂からの道の合流地点)、終点は赤間関(下関)、小倉、長崎ということもあり、街道の名称も各地で様々な呼び方もされます。例えば姫路城下町備前門より西に向かう西国街道は「備前道」と記載されることがあります。

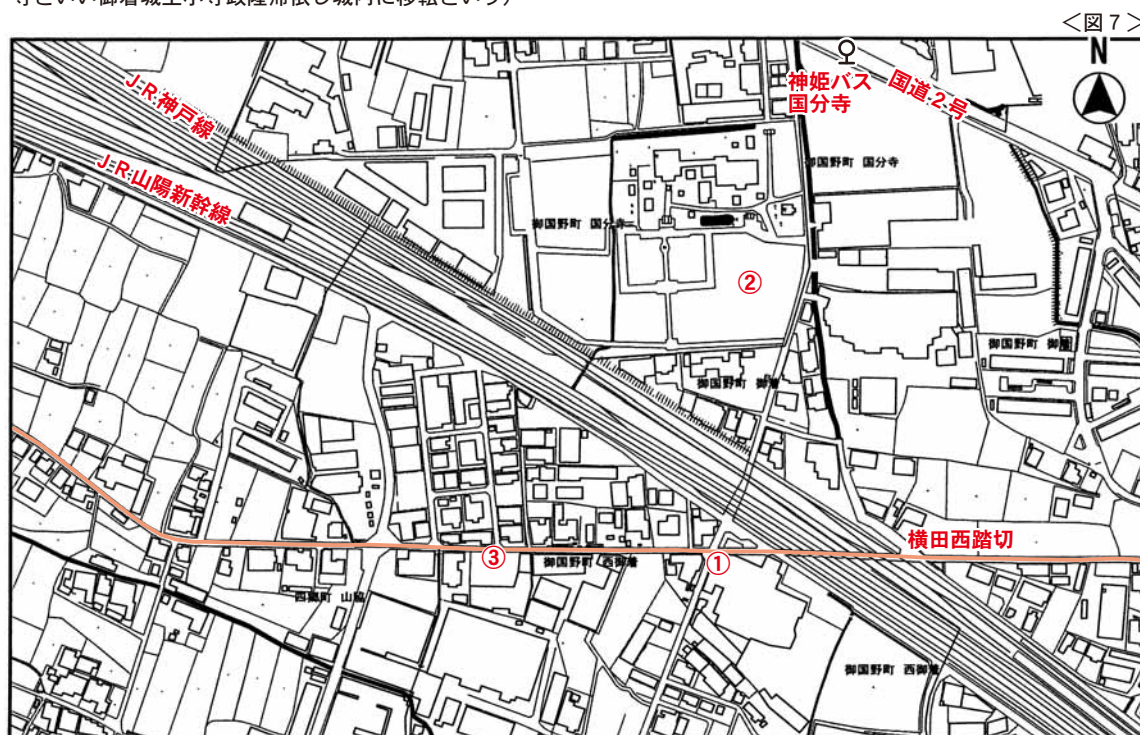
さて、古代から用いられる「山陽道」の名称は、天武天皇14年(685)に「山陽」、大宝3年(703)に「山陽道」が初見であり、これは古代律令国家が全国を五畿七道に区分した地方行政区画を意味しています。律令国家は七道各道に駅家を設置して都から各国の国府に通じる駅路(官道)を整備し、10世紀の「延喜式」(律令の改正法施行細則集)で、駅路は大路・中路・小路と規定し、都と太宰府を結ぶ駅路が唯一の大路とされ地方行政区画と同じ名称である「山陽道」と記されるに至ります。

古代山陽道は駅路(官道)でしたが、中世に至るまでに駅制の維持は困難となり、その後自然環境の変化、中世的な町の形成、瀬戸内海航路の発展、蒙古襲来に伴う道路整備など様々な要因からルートは変遷したとみられます。さらに近世(江戸時代)に至って、城下町の建設、河川つけ替えや改修、宿駅整備などの要因からルートは変遷しており、各時代のルートの特定や変遷は難しいことが現状です。特に戦後の高度経済成長以降、開発、圃場整備、区画整理、道路の新設・拡幅・舗装などで社会資本の充実が図られる一方で道の姿も一変しました。

ここでは姫路市域の西国街道を東から西にたどり、ルートは実線(——)で示し、消滅や推定は破線(---)で示します。沿道の文化財は丸数字(①②・・・)、主な国道・河川・交差点やバス停等を赤字で記します。

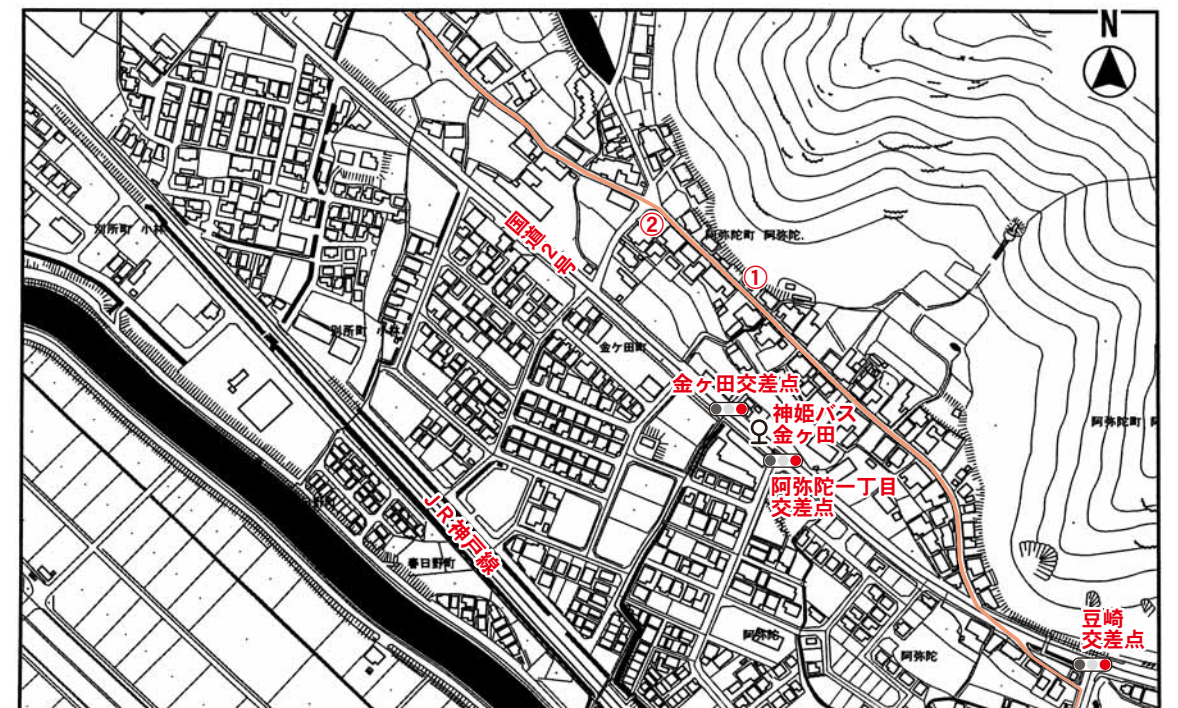


①福乗寺(真宗大谷派、もと英賀本徳寺三道場の一つ天川道場)、②旧飾磨郡・印南郡境(御着城門跡という)、③大歳神社(御着の氏宮)、④延命寺(天台、境内に貞和元年(1345)銘の板碑)、⑤法華寺(日蓮宗、天正年間に日登開基)、⑥小原家住宅(市都市景観重要建築物等)、⑦御着本陣跡(御着公会堂、御着は西国街道の宿駅)、⑧御着城本丸跡(御着城跡公園)、⑨御着城二の丸跡(御着城跡グラウンド)、⑩旧天川橋移設地、⑪市指定史跡「黒田家廟所」(御着城本丸跡、享和2年(1802)福岡藩主建立)、⑫小寺大明神(御着城本丸跡、小寺政隆・則職・政職を祀る)、⑬高札場跡、⑭天川橋(文政11年建造の竜山石製旧天川橋は昭和47年損壊)、⑮徳證寺(本願寺派、もと真言の国分尼寺で金剛尼寺といい御着城主小寺政隆帰依し城内に移転という)



①道標(国分寺参道分岐点)、②国指定史跡「播磨国分寺」(山号牛堂山、天平13年(741)諸国に国分寺建立の詔、七重塔基壇あり、本堂東に県指定文化財「石造宝篋印塔」(室町時代、花崗岩製)、③一里塚跡(明治に至るまで高さ2mの塚があったと伝わる)

<図1>



①地蔵堂 ②一里塚跡 (注)右下の図外、阿弥陀池(姫路に名残を惜しむ地、なみだ池とも)、JR曾根駅北側に5基の道標(昭和45年陸橋建設に伴い大日山南麓の曽根・高砂道との分岐点から移設)、①②は高砂市域

